公開講演会記録

ハルビンからの引揚げルートを自転車でたどる

元ＪＡＬパイロット　丸山　巌

生まれて少年期までを過ごした故郷ハルビンから敗戦の混乱のなか、日本に引揚げてきたときにたどった葫蘆島（ころとう）までの全行程１０００㎞を自転車で走った。自転車をこぎながら当時に思いをはせ、戦争や引揚げ途中で亡くなった人々を慰霊する旅である。

実はこれより３年前に初めての自転車旅行を突如思いつき、２０１２年７月から47日間かけて、上海―西安―洛陽―徐州―上海を自転車で一巡りした。計画らしいものもなく行き当たりばったりの旅だったが、毎日楽しい「天天快楽（テンテンクァイルゥ）」だった。中国の魅力が素晴らしくて忘れられず、もう一度中国を走ろう！と今回の旅になった。

旅のテーマ

今回の自転車旅行にＣＲＩ（中国国際放送局）が関心を示し、全旅程を同行取材することになった。同行取材陣はなんと25人の大部隊で、この一団がハルビンから葫蘆島までの２週間を付き合うことになった。こうなると番組企画としては、引揚げルートをただ自転車で走るというだけではすまず、いろいろな意味を盛り込んだ「旅のテーマ」が必要になる。放送局と打ち合わせた結果、次のようになった。

《旅のテーマ》

①戦後70年に際し、丸山が引揚げたときのハルビンから葫蘆島までのルートをたどる

②中国の青年との交流

③戦争犠牲者の慰霊

少し補足すると、引揚げルートについては、１９４６年当時は国共内戦の真っ最中だったため、最前線は徒歩で超え、葫蘆島にたどり着くまで２か月を要した。今回は１０００㎞の道のりを自転車で２週間かけて走る計画である。また、中国青年との交流は吉林大学と北京の大学で行うことにした。さらに、戦争犠牲者の慰霊については、中国人か日本人かを問わず、すべての犠牲者に対して慰霊することにした。

そして旅のテーマには書いてないけれど、敗戦後の混乱したなかで引揚げまでの１年間、丸山家に救いの手を差し伸べ

てくれた命の恩人を探してお礼を言いたい、すでに亡くなっているなら子孫に会って感謝を伝えたい、という大きな目的も持っていた。

《参加者》

自転車旅行の参加者は3人で、引揚者である丸山巌本人（80歳）と伊藤裕隆さん（63歳）、小川健二さん（65歳）。伊藤裕隆さんは元福島県立小高工業高校校長をつとめた人で、東日本大震災のボランティア活動に行ったとき知り合った。彼とは、3年前に自転車で中国を2000㎞も走り回り、「天天快楽」をともにした間柄なので気心は知れている。小川健二さんは元ホテルオークラの料理人で、テヘランで知り合った古い友達である。今はインドのガザ出身の奥さんとシドニーに住み、オーストラリア国籍を取得している氷彫刻芸術家という変わり種。いずれもこの自転車旅行に自ら進んでエントリーしてきた。

ハルビンへ

2015年7月12日、伊藤さんと新潟空港から中国南方航空616便に乗り込みハルビンへ向かった。シドニーからくる小川健二さんとはハルビンで合流することになっている。ハルビンへの空路はあいにくの曇天で、巡航中も雲の上を飛んだものの、その上空も一面の黒雲で昼間なのに機内も薄暗い。日本海も沿海州もまったく見えない空の旅だったが、なぜか目的地付近だけがぽっかりと大きな穴が空いたようにピーカンだった。哈爾浜（ハルビン）太平国際空港に着陸した。滑走路はかなり長く、3000m級とお見受けした。後でパイロット仲間に確認したら3300mで、羽田の3000mよりも長かった。（日本最長は成田と関空の4000m）。土地が有り余っているだけに国際級だが、空港の周りは一望千里の畑で、駐機している飛行機もチラホラ。乗降用のブリッジがないので、バスで入国ゲートへ移動する。いわゆる〝沖留め〟である。ターミナルビルの造りもなにやら田舎臭い。しかしすべての掲示が中国語と英語で表示され、そこへRが逆向きになったようなキリル文字のロシア語が添えてある。19世紀末にロシア人が「東洋のパリ」を目指して創作した国際都市ハルビンだけのことはあり、ふだんはロシアからの訪問客が多いことをうかがわせる。

現在のハルビンは人口1000万を超える東北地方最大の都市で、高層アパートが立ち並ぶ。道路は広いが市内に入ると車と人があふれ、とつぜん渋滞が始まった。ホテルは果戈里（グオグオリ）大街に面した果戈里賓館で、宿泊手続きを終えるとすぐに恩人探しにとりかかった。

恩人探し

恩人探しのためハルビン在住で知人の洪瑶楹さんを訪問する。10年ぶりの再会である。東京生れの洪さんは87歳となられたいまもダンディで、日本統治の台湾で過ごされたから日本語がめっぽう堪能である。前回も、頼山陽の恋歌を引き合いに「君王上（きみおうじょう）に点なくんば……」などと講義をされて、理解できずに目を白黒させてしまった。その洪さんに消息調査を依頼した命の恩人の名前は林志楊さん。林さんは旧満州国濱江省の役人で、秘書課では父の同僚だった。

45年8月15日の日本敗戦のとき、母と私（10歳）と妹（7歳）の3人で、ハルビンに置き去り同然の状態になった。父は応召して呉の軍港へ、長男は大学生として奉天（瀋陽）に、二男は予科練を志願して鹿児島へと、6人家族が4か所にバラバラになり、それが敗戦とともに音信不通になってしまったのである。私たち3人はなんとか生き延びなければなら

ない。そのとき手を差し伸べてくれたのが林志楊さんだった。冬を控えたある日、大量の救援物資を持って同僚とわが家にやってきてくれたのである。戦後の混乱期だから、物は極端に不足していて、戦勝国の中国人やロシア人でも生活は楽じゃない。そんななかの救いの手だった。食糧も有難かったが、持ってきてくれた石炭がなければ厳寒のハルビンの冬は越せなかった。それを思えば、林さんはまさに命の恩人である。

しかし、事前に消息調べをお願いし、洪さんも八方手を尽くしてくださったが、林さんには子どももなく、縁者の消息もまったく不明とのことだった。どこに埋葬されているかもわからず、お墓参りもできなかった。

ハルビンでお世話になったもう一人に、私たちが住んでいた家の家主のロシア人エルマコフさんがいる。エルマコフさんはロシア革命から逃れてきた白系ロシア人で、父とは仲が良かった。強盗同然のソ連軍の兵士を何度も追い払ってくれたうえ、母を家政婦として雇ってくれた。また特別ルートで手に入れたヤミ物資の洗濯石鹸を売っておいで、と渡してくれた。もう売れるものは売りつくしていた時期だけに、この援護射撃は、まさに干天の慈雨。小ぶりの煉瓦ほどもある固形の洗濯石鹸は飛ぶように売れて、日に１００円もの売り上げがあった。純益は30円。この儲けだけで、３人家族の１日の食費が十分に賄えた。中国人の林志楊さんが〝命の恩人〟なら、エルマコフさんは〝福の神〟であった。エルマコフさんの消息について、近所に住んでいた人を探し当てて聞いてみたが、消息は不明という。70年の月日はあまりにも長く、何もかも押し流してしまったようだ。もう、これ以上の恩人探しや詮索は止めて、なにか別の形での恩返しを考えることにする。

ハルビンから２００㎞ほど東の方正県という衛星都市に、敗戦の混乱のなか亡くなった満蒙開拓団員のために、中国人の住民が慰霊碑を建ててくれたという。残留孤児だった人たちが日本からやってきて慰霊祭をすると聞いたが、日程のやり繰りがどうにもつかない。敗戦に際して、自国民を外地に〝棄民〟しようとした国家に対する憤りがあるだけに、慰霊祭に参加できないのは残念である。考えた末に、中国国際放送局のスタッフにお願いし、花束を届けてもらうことにした。

ところで、私は投宿しているホテルから数ブロック先で生まれ、11歳まで育った。念のため、日本を出発する前とっておいた戸籍謄本には、

【出生日】　昭和10年２月３日
【出生地】　満州国濱江省ハルピン市
（戸籍謄本はハルピンと記載）

と記されている。現在の黒龍江省哈爾浜市は、当時は濱江省ハルピン市と呼ばれていて、私がこの地の生まれであることは間違いなかった。

取材をかねて、ハルビン随一の繁華街であるキタイスカヤ（現・中央大街）に足を運んでみた。キタイスカヤとは、ロシア語で「中国人街」と言う意味である。なのに、まるでパリの一角を切り取って貼り付けたかのようにエキゾチック。石畳の道にアール・デコなど西欧風の建物が軒を連ね、昔とすこしも変わっていなかった。モデルン・ホテルの玄関から、エルマコフさんがひょっこり現れても、ちっとも不思議じゃない雰囲気がある。

そんな懐かしい情景に接すると、あの敗戦当時のことが鮮明に思い出される。日本が負けたと聞いた途端、大人たちは手製の「ソ連国旗」を軒先に掲げ始めた。そう、赤地に黄色い鎌とハンマーが描かれたあの旗であるが、そんな小細工でソ連兵が手加減してくれるはずもなかろう。大和魂とやらは何処へ置き忘れて来たのであろうか？ あまりの腰抜けぶりに腹

が立ち、母にも頼んでわが家だけは旗を掲げなかった。

それにしても、敗戦から5日後の8月20日、ハルビンに進駐してきたソ連軍の装備は凄かった。ほとんどの兵士がシュパーギン41やスダエフ43短機関銃で武装している。明治時代の遺物38式歩兵銃が主体の〝無敵の関東軍〟とは大違いである。しかも徒歩ではなく、アメリカ製のジープやトラックを連ねてやって来たのだ。これでは日本が戦争に負けたのも無理はない。〝兵は兇器〟の言葉どおりで、生半可な軍備は国を誤るだけだ、と子ども心にも肝に銘じたものである。もちろんソ連軍の蛮行は許せないが、かつての日本軍も1918年（大正7年）の「シベリヤ出兵」あたりから、世界の鼻つまみ者になってしまったので、他人のことをとやかくは言えた義理じゃない。

厳しい冬が過ぎるとソ連軍は撤退し、春の訪れとともに八路軍がやって来た。後の人民解放軍である。装備は関東軍から捕獲した中古のオンボロだったが、強盗同然のソ連軍と違って軍規は厳正そのものだった。兵士たちが歌っていた『三大紀律　八項注意』の軍歌そのままに、乱暴、狼藉、略奪などとは無縁の軍隊であった。

当然ながら八路軍は民衆から熱狂的に支持されて、街の治安は一気に回復した。この評価は、中国各地から引揚げてきた邦人からもよく聞くことで、国共内戦の帰趨（きすう）とのちの人民共和国建国を予測させるに十分なものがあった。

出発

インターネット通販で注文しておいた自転車を、市内の店で受け取り、付近を試乗してみる。上海にある「永久」Forever社製のドロップハンドルのスポーツタイプである。ホテルの裏通りの朝市で、安物のキャンバス・シューズと目覚まし時計を調達して準備完了。余談だが、朝市に「血圧計ります・料金1元」という看板を掲げた屋台があったのにはビックリ仰天。そばには、もっともらしく聴診器を首にかけた白衣のおっさんとサクラらしき青年も一人いた。13億人もいるお国だから何でもありだろうけど、果たして商売になるのだろうか？

7月16日：出発前のホテル

7月16日、いよいよ出発。G102を南下する。道路にGが付くのは「国道」、Sは「省道」、Xは「県道」である。ほぼ直線だが大地はうねり、下り坂と上り坂の繰り返しになるので結構しんどい。北海道の石狩平野に似た風景が続くが、国道の幅は広くない。3年前に走った河南の道はもっと良かった。経済的に裕福な上海から南京にかけての400㎞は特にすばらしく、立派な緑の分離帯3本を備えた16車線の大街道もあった。市街地には、車道との分離帯が設けられた自転車用道路が併設され、自転車用だけで2車線分の幅があった。自転車道にはバイ

真っ直ぐに伸びるG102号線

初日の快走

クなどの二輪車や小型の三輪車も走っていたが、ときには耕耘機も走っているのがいかにも中国的だ。

ハルビン郊外で７３１部隊の旧跡を訪ねてみたが、改修中で中には入れなかった。７３１部隊の薄気味悪い評判は当時から伝わっていて、少年の私もその存在は知っていた。

午後遅くになって前輪のパンクに見舞われた。修理を試みるが、チューブがタイヤより大きく、手持ちの修理道具ではどうしても直せない。通販では半値のふれ込みだったが、どうやらジャンク品を寄せ集めて組み立てた代物らしい。そういえば、走り始めの10㎞付近でハンドルのグリップがズルズルと滑り始め、よく見るとゴムでもプラスチックでもなく、黒いテープを重ねて巻き付けただけだった。初日からこれでは先が思いやられる。自分では進めなくなったので、ヒッチハイクを試みる。通る車を必死で呼び止めているとワゴン車が止まってくれて、運転していた恰幅のいいおばさんが気前よく自転車と私を載せて12㎞先のホテルまで送ってくれた。元気印のおばさんは、マニュアル車でビュンビュンと飛ばす。それを追いかける撮影隊は大変だったが、立ち往生した身には大助かりで大感謝だった。それに引き替え、小川さんと伊藤さんは、夕やみ迫るなか必死にチャリをこいで、15分遅れの到着だったが……。

２日目の双城市で、ジャンク・タイヤをプロの自転車屋に持ち込んで修理完了。これで明日からの快走が可能となった。

３日目の出発前に、紅包をかざして「長春に着いたら、皆でビールを１００本飲もう」と撮影隊を激励。紅包は中国式の祝儀袋で、文字通り真っ赤な袋に金文字で「吉祥如意」とか「招福」などと書いてある。中身は日本でもらったご祝儀である。紅包が取材スタッフとの距離をさらに縮めてくれたようだ。

７月18日：紅包でスタッフを激励

撮影隊とひたすら長春市に向けて走る。郊外の国道は交通量も少なく、平地では延々と直線が続く。人家もポツリポツリとあるだけで、ちょっとした起伏があると、先が見えないほどに茫漠たる広野が続く。信号機は都市周辺にしかないが、中国の信号機は「紅」と「緑」の２色が主体で、「黄色」があるのは珍しい。だから中国の信号機は「紅緑灯」と呼ばれているのであろう。運転手のマナーは日本で喧伝されているほどには悪くない。分離帯のない田舎の道でも、トラックは自転車に決して近寄らない。

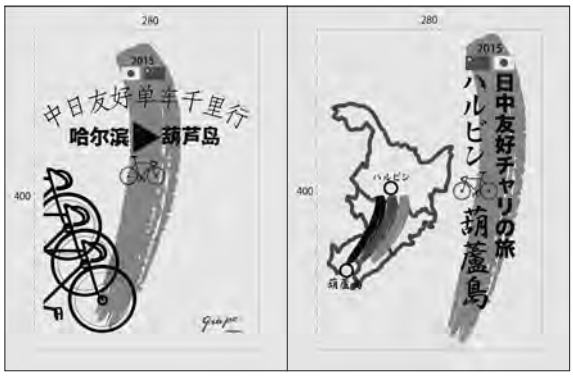
カメラマンの活躍

我々がフラフラ走っていると、遠くから警笛を鳴らしてしっかり離れながら追い抜いてゆく。

黒龍江省から吉林省へ入り、飯屋で昼食をとる。注文以外にもたくさんの食べ物が出てきた。珍しい外国人だから歓待するということらしく、店主のおばさんがお代は一文もいらないというが、そうもいかないので無理やりお金を渡す。

長春

パンクしたときお世話になった元気印のおばさんに、当地から宅配便でお礼のTシャツを贈っておいた。子どもさんへのプレゼントです、とメモを添えておいたら、数日後に受け取りとご挨拶の電話がスタッフ宛に入った。律儀な方である。



記念のTシャツ：フロント（右）、背中（左）

7月20日、吉林大学で学生たち10数名と交流。この大学は、学生数4万人の超有名校だそうである。日本でもらった餞別でみんなとレストランに行き、さらに交流を深めたが、男女とも秀才型ばかりでイマイチ歯ごたえがなかった。

旧満州国の首都（新京）だった長春では、かつての皇帝・溥儀の宮殿を訪れたが、付近に残っていた関東軍の本部に比べて粗末かつ貧弱で驚かされた。博物館になった宮殿には、満州時代の巨大なビル群が立ち並ぶ写真が展示してあったが、これらの建物はすべて日本の大手ゼネコンが建てたものである。〝リニア談合〟でも名前が挙がっている多くの会社が満州に進出して、しっかり儲けていたことが今さらながら分かる。

公主嶺

吉林省公主嶺では、11歳で引揚げたときの経験をまざまざと思い出した。長春から南に下った公主嶺は、関東軍20万人が駐留したほどの軍事的要衝で、引揚げ時は国共内戦の最前線になっていた。鉄橋が爆破されて鉄道は使えず、日本人を帰国させるために休戦した緩衝地帯を、北から南へ深夜に徒歩で通過した。母に手を引かれ、私が妹の手を引いての数珠つなぎで、寝ながら歩いたことを覚えている。今回現場に立って爆破された鉄橋跡を見た。我々が夜間に渡ったのは木の仮橋だったこともわかった。

開原の月桂冠

7月24日、自転車で走っている少年が月桂冠のようなものを被っている。開原という街の近くであった。スタッフによると、この地方の子どもが遊びで作る冠だという。呼び止めてよく見ると、葉っ

7月24日：月桂冠の少年と

ぱの付いた柳の小枝を編んだ冠で、後ろには1㍍以上も尻尾のように長い枝が伸びている。手真似でおれのバンダナと交換しようと持ちかけたら、冠はすぐにくれたが、バンダナは要らないと言う。ハゲが伝染するのを嫌がったのかもしれない。中学生くらいであろうか、日本に連れて帰りたいほど素直で愛嬌たっぷりの少年だった。

鉄嶺県平頂堡村

7月25日、遼寧省に入り、散髪に行った。床屋のおばさん3人が総出の歓迎で、聞いてみれば「初めて見る日本人」だという。正規の料金は10元だが5元でいいという。さきの飯屋のおばさんといい、中国の田舎のおばさんは過分なおもてなしが無上の喜びらしい。ここも甘えるわけにいかないので、おもてなしへの感謝のつもりで、入れ代わり立ち代わりの記念写真にも応じて、倍の20元を置いてきた。

7月25日：田舎の散髪屋

それにしても中国の生活必需品は安い。人口は日本の10倍強、GDPは世界第2位で日本より少し上。それを1人当たりに均すと約10分の1だから、単純に考えれば、人々の収入だって日本の10分の1で勘定が合う。物価だって日本の10分の1でなければ、人民が黙っちゃいないかもしれない。

ビールの大びんが2元～3元。ミネラルウォーターやスポーツドリンクが意外と高く、容量は少ないのに値段はビール並み。ホテルは120元～600元ほどで、最低でもシャワーとエアコンは完備していた。食事は、昼なら1人10元、豪華な夕食でも100元程度、味はさまざまだがひどい外れはなかった。どこに行っても物は豊富で、都市と地方の格差はあまり感じなかった。

3年前の為替レートは「1元＝12円」だったので割安感もあったが、今回は「1元＝18円」になっていた。物価は上がっていなかったけど、出費がかさむのは為替レートのせいだから、これはやむを得ない。

さて、道中は真夏なのでとても暑い。最高気温は40℃にもなったが、それでも数値ほどには暑さを感じない。もともと夏に強いこともあるが、空気が乾燥しているので、日陰に入るとすぐに汗が引く。しかも、自転車で走っていると、風を切るのが扇風機にあたっているようで、爽快この上ない。よく整備された街道の並木道も日陰をつくってくれるのでありがたい。停まると暑いが、日陰に入るとタオルを使うまでもなく汗はすぐ引っ込む。ともあれ水分補給は欠かせない。中国では白湯（さゆ）をよく飲む。一流のレストランでも、黙って座れば白湯が出てくる。お茶は有料である。走るときもいろんな飲み物を試してみたが、渇きを止めるのには白湯が一番だった。さすがに中国四千年

の歴史が生み出した処方だと納得した。

瀋陽

7月26日、満州事変の発端となった柳条湖鉄道爆破事件の現場を訪れた。1931年9月18日（昭和6年）に日本の所有する南満州鉄道（満鉄）の線路が爆破されたもので、関東軍はこれを中国軍による犯行と発表することで、満州における軍事展開およびその占領の口実として利用した。実際は関東軍が謀略のために爆破したもので、爆発の規模は実に小さく、ウィキペディアによると片側のレールが約80㎝破損し、枕木の破損も2か所にとどまった。これでは爆破工作としては失敗だろう。爆破現場に立つと、犯行を行ったとされる張学良ら東北軍の兵舎・北大営までは約700mしかない。中国軍の仕業ならこんな近い距離で奇襲に失敗するはずがない。

「〝9・18〟歴史博物館」も訪れたが、展示は日本の残虐行為と昨今の右傾化に関するものばかりだった。館長さんには、見学した人たちが未来に希望を持てるよう、日中友好に努力する日本人もいることを紹介し、展示にも加えてほしいとお願いしておいた。

7月26日：「〝9.18〟歴史博物館」

葫蘆島に到着

葫蘆島を目前にして、発熱をこらえながら自転車をこいできた小川健二さんがとうとうダウンした。伊藤裕隆さんも走るのをやめてしまった。3人一緒に完走したかったが、とても残念。そんなわけで7月29日、最後は車に乗って終着点の葫蘆島にたどり着いた。7月16日ハルビンでペダルをこぎ始めてちょうど2週間、1000㎞の旅だった。

いまや人口300万人の海浜都市・葫蘆島も、かつては小さな漁村だった。中国各地からの引揚者が日本へ向かう船に乗った拠点の港で、105万人が通過したといわれている。さぞかし中国の人たちは、物不足と物価の高騰などで難儀されたことであろう。引揚者たちは、船に乗れるまでバラックやテントで過ごしていた。集結から数日後、米軍貸与のLST（戦車揚陸艇）に乗せられて日本に向かったが、日本人の船員さんの顔を見て、やっと故国に帰れるという実感がわいたのを覚えている。

7月31日、葫蘆島市の龍湾公園にある、日本の婦人が寄贈した石碑に参拝し献花と焼香。引揚げの途中この地で大病に倒

小川さんにお灸をすえる

れた彼女を、中国人が助けてくれたことへのお礼の石碑だという。人の背丈ほどもある自然石に「恩」の字が大きく刻まれているが、薄汚れていて読み難い。小川さんと2人で石碑を磨き、恩の字に朱色のペンキを入れた。

午後は港を見おろす丘の上に建つ「105000日本僑俘遣返之地」と大書してある記念碑に参拝。105万人の日本人がここを通過して引揚げたことが碑に数字でしっかりと刻まれている。ここでも献花と焼香をして、中国式に〝金元宝〟を焚いた。金元宝は金色の紙で作った供え物で、冥銭の一種。〝三途の川の渡し賃〟のようなものである。取材に来ていた地元の記者に「日本でも金元宝を焚く習慣があるのか？」と聞かれたが、もちろん日本にはない。「中国流の弔い方を加えたことで、感謝と謝罪の気持ちを込めたつもりです」と答えておいたので、中国の人たちにも、こちらの意思は十分伝わったと思う。

葫蘆島の丘から引揚げ港を望む

お世話になった林さんやエルマコフさんへの感謝を込めて、また引揚げの途中で亡くなった人たちのご冥福を祈り、迷惑をかけた中国の人たちへのお詫びの気持ちも込めての献花と焼香だった。慰霊の旅はこれで終了である。

肩の荷を下ろした感もあるが、運命の糸に操られたかのような自分の人生を思わずにはいられない。父は新兵を引き連れ、飛行機の燃料になる松根油を求めて山奥に入っていたので、呉軍港の大空襲にも広島の原爆にも遭わなかった。奉天で敗戦を迎えた長兄は、バザールでのトラブルに巻き込まれ、危うく殺されそうになったところをソ連軍の将校に助けられたという。予科練に志願した次兄は、飛行機も燃料もなくなり、もっぱら土方専門の〝ドカ練〟だったので戦闘とは無縁だった。母と私と妹の3人も、敗戦のとき大都会のハルビンに住んでいたのが、なによりも幸運であった。中国の諺にも「大乱居城／小乱居郷」とある（城は都会、郷は田舎の意味）。しかも、あの公主嶺での深夜の強行軍で、誰かがちょっとでも手を放していたら、すぐに落伍して行方不明になっていたのだ。それを思えば、4か所に分れていた6人の家族が五体満足で再会できたのは、奇跡としか言いようがない。46年10月、6人は原爆で焼け野原となった父母の故郷広島市に集結したが、帰着は私たち母子3人組が最後だった。

旅を終えて

北京に到着後、2台の自転車を寄贈した。小川健二さんはCRI（中国国際放送局）に贈呈したので、走行の記録とともにオフィスのロビーに飾ってある。私の自転車は、同行取材の若手カメラマン鄭毅さんへプレゼントした。名前の日本語読みが「たけし」なのは、次兄の「彪：たけし」と同音で、これも何かのご縁であろう。共通語はつたない英語だったが、「たけし！」と声をかけると「は～い」と日本語で返事をする好青年である。

ひと休みして、8月3日は北京米国英語語言学院で、夏期講習の日本語学習の

学生２００人との交流会に参加した。質問も多くて１時間の予定が２時間以上にもなり、最後は女子学生に取り囲まれてのサイン会のようになった。ここの学生たちは熱気にあふれ、日本への関心の高さに驚いた。

ＣＲＩが同行取材した80歳慰霊のチャリンコ旅は、１時間番組「回想の大地―70年の時を超えて」として放送された。

取材完了の記念撮影

ＣＲＩのホームページに今も掲載されているので、「回想の大地」で検索すると番組をインターネットで見ることができる。

今回が２回目の中国自転車旅だったが、陽気で親切な人ばかりで不愉快な思いをしたことはほとんどなかった。出会った中国人は数えきれないほどいたが、中国語が喋れないのに、とくに不便を感じなかった。戦後70年にもなり、世代交代が進んでいるせいかもしれないが、日中15年戦争のかげりは、ほとんど感じられない。政治状況は別として、庶民の素晴らしい包容力を感じさせてくれた旅だった。

葫蘆島の港が見える丘の上から、日本に向けて紙ヒコーキを飛ばしてみた。しかし、何度やっても、風にあおられて舞い戻ってきた。この大地が呼んでいるのかもしれない。まだまだ、中国とのご縁は続きそうである。

（２０１７年11月22日・公開フォーラム）

筆者略歴（まるやま　いわお）

元日本航空機長会会長（１９８２年～１９９２年）。

東日本大震災発生直後から現地ボランティア活動を開始、現在も支援を行っている。

１９８０年に故稲尾和久氏とともに「日本航空棒球団」を結成、厦門大学や福建師範大学などを訪問。それをきっかけに中国との草の根市民交流を続けている。

2015年ハルビン―葫蘆島の引揚げルートをたどる旅程

７月12日
- 新潟空港から空路ハルビン到着
- 恩人探しするが、消息は不明

７月14日
- スポーツタイプの自転車購入

７月16日　黒龍江省ハルビン出発
- 731部隊の旧跡を訪ねる
- 前輪がパンクする

７月20日　吉林省長春に到着
- 吉林大学で学生たちと交流

７月23日　吉林省公主嶺に到着
- 深夜徒歩で突破した場所を見る

７月26日　遼寧省瀋陽に到着
- 柳条湖爆破事件の現場を見る

７月29日　遼寧省葫蘆島に到着
- ２週間の自転車旅行を終える

７月31日
- 「恩」の石碑を補修し参拝献花
- 「1050000日本僑俘遣返之地」の記念碑に参拝

８月３日
- 北京米国英語語言学院で学生200人と交流